

## 令和5年度第1回四日市市総合教育会議

令和5年7月31日

10時00分 開会

### 1 開会

**○荒木政策推進部長** 定刻となりましたので、令和5年度第1回総合教育会議を開催させていただきます。

司会でございますが、私、政策推進部長の荒木が務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の議題でございますが、事項書でございますように、1点が新図書館の整備について、2点目といたしまして児童生徒への持続可能なきめ細かい指導・支援のあり方についてという、2つの議題でさせていただければと思います。

全体で11時半を目途に終了予定でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、この会議でございますが、傍聴や記者による取材等がある旨、事前にご了解いただければと思います。

それでは、事項書に従いまして進めさせていただきます。

### 2 新図書館の整備について

**○荒木政策推進部長** 1つ目でございます。事項書2でございますが、新図書館の整備についてということで、新図書館の整備に向けましては、昨年度の総合教育会議でも自動車文庫の継続や駐車場の整備に向けた考え方をご報告いたしまして、皆様からもご意見いただいたところでございます。

今年度から基本設計の段階に入っております。新図書館の具体像についていよいよ本格的な検討に入っております。あわせて、市民の皆様はじめ様々な方のご意見をお聞きする段階でございます。多くの意見をいただいているところでございます。

本日は、新図書館に必要な機能、運営、期待することなどについて、皆様からのご意見をいただければと存じます。

まずは、事務局より資料の説明をお願いいたします。

**○堀田図書館長** 図書館長の堀田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

資料の「新図書館整備について」をご覧ください。

1 番の市民意見の聴取についてからご説明させていただきます。

新図書館部分につきましては、当初計画をつくらせていただいた段階では、市役所の隣が建設予定地でしたが、予定地が駅前に変更となりましたので、建設予定地変更に伴う面積の変更もあります。サービス内容や蔵書規模の計画も一部見直しが必要となってきましたので、現在、コンサルティング会社と契約いたしまして、先進事例等の調査を進めるとともに、市民の皆様から広く意見を聴取いたしまして反映させていこうという段階で進めております。

表をご覧ください。

現在意見聴取をさせていただいておりますのが、図書館ボランティアになります。図書館ボランティアは、録音奉仕のボランティアと点字資料のボランティア、読み聞かせ等のボランティアが、合わせて8団体いらっしゃいます。その方たちに、まず5月に意見聴取をさせていただきました。今後も定期的にさせていただく予定でございます。

ワークショップにつきましては、学生向けワークショップと市民向けのワークショップで進めていきたいと考えております。

まず、市民向けワークショップにつきましては、7月17日に1回目を開催させていただきました。今後は、夏休み中に学生向けのワークショップ、その後、9月10月とワークショップを進めさせていただきます。利用者の多くがお子さん連れのお母さんお父さんたちでもありますので、今回はワークショップに託児つきの回も設けまして、一般市民の方とともに子育て世代の方たちにも参加していただけるようなワークショップを計画していきたいと思っております。

子どもの図書館の諮問機関であります図書館協議会で、市民の皆様からいただいている意見を公表しながらご意見をまとめていきたいと思っております。

7月25日に行った本年度第1回の協議会では、7月17日に出てきた意見であるとかボランティアさんから頂戴した意見などを説明させていただいているところです。

また、6月16日から7月23日まで、図書館の現在の利用者の方たちに、どんな図書館が欲しいかというご意見を書いていただきたく、「新図書館に願いを」というイベントをさせていただきました。こちらで用意した画用紙のおほしさまに、小さなお子さんから高齢者の方までたくさんのご意見をお書きいただき、300以上のご意見を頂戴しました。

せっかくですので、夏休み期間はそれを皆さんに見ていただくということで、2階と3階の階段の踊り場等に展示をさせていただいております。また、こちらでまとめましたそれ

ぞれの意見につきましては、私どもの新図書館に向けてのホームページを立ち上げておりますので、そちらでも公表していく予定でございます。

今年度後半の意見聴取ですけれども、前半ではフロア構成等の検討をしていきたいと思っています。後ほどご説明させていただきますが、フロア構成を説明させていただいて、後半は具体的な部屋のこと、スペースの検討などを、写真やイラストなどを交えて具体的なイメージをつかんでいただきながら意見聴取を進めていきたいと思っております。前半のフロア構成のことをまとめまして、秋ぐらいの定例会で皆様にご報告させていただければと思っております。

2番にまいります。新図書館等を含む中心市街地拠点施設のフロア構成についてです。

こちらにつきましては、ワークショップの段階では2案提示させていただいております。そのうちの1案を今回提示させていただきました。これはあくまでたたき台として用意したフロア構成ですので、必ずしもこうなるというわけではなくて、こういった考えのもとに案をつくってみましたということで、皆様のご意見を頂戴しながら、今後変更していくものになります。

全体的に見ていただきますと、1・2階に民間施設や観光・情報発信施設が入りまして、3階から8階の部分、緑色の部分に図書館が入る感じになっております。観光・情報発信施設や交流施設が下でございますので、そのにぎわいを取り入れる形で、エントランスのあたりは比較的にぎやかな感じで、上に上がっていくとだんだん静かなフロアになっていくという構成でどうかというところで、この案は提示させていただいております。

複数階に分かれますので、青い矢印にありますように新図書館専用のエレベーターやエスカレーターを用意するとともに、各フロアのつながりを大事にしながらやっていきたいと思っております。

ボランティアさんたちの打合せであるとか各種講座については、8階の事務所の近くに用意する会議室等でできたらいいのではないかと考えております。

現在の市立図書館は本館という位置づけですので、全般的な本を全て用意しています。点字録音資料のようなバリアフリーの資料であるとか、四日市は公害や各種工業とかいったものなどいろんな資料を持っていますので、新図書館へ移行後はそういった地域資料などはそれぞれの特定の階に用意させていただいて、それ以外の本も、今の図書館の倍ぐらいの開架を目指していきたいと思っております。

今の図書館には、目が不自由な方や本が持てない方たちに対して、私どもで本や資料を讀

んで差し上げるための部屋、対面朗読室というものがないですけれども、そういったお部屋を用意したりとか、ボランティアの方たちが録音していただくこともあるのですが、そういったお部屋も今はいい環境ではないので、ちゃんと防音の整った部屋を用意するなど、皆さんの活動に使っていただけるようなものを用意していきたいと思っています。

閲覧スペースや個別学習スペース、学習スペース等につきましては各フロアに配置予定ですので、緑色の枠の中には書き込んでごさいません。どのフロアにもいろんな椅子があったり、いろんなテーブルがあったり、いろんな学習室があったりということを考えていきたいと思しますので、そのあたりにつきましては市民の方々のご意見を頂戴しながら、どのフロアにどんなものを置いていくかというのを検討していきたいと思っております。

右側をご覧ください。

今までさせていただきましたワークショップや意見聴取会などで頂戴した意見の主だったものを書かせていただいております。

一番上が、図書館ボランティアさんから出た意見になります。この方々は何度も意見聴取をさせていただいておりますので、本当に具体的な意見を頂戴しております。先ほど申し上げました対面朗読室を作ってほしいとか、ボランティア専用の作業室が欲しいとか、長い時間活動していただいておりますので、お弁当などを持ってきて食事が取れるスペースが欲しいというお話。せっかく駅前に行くのであれば、閉館時間を今より遅くしてほしいとか、休館日数を減らしてほしいとか、たくさんの荷物をお持ちですので、リターン式のコインロッカーがあると便利ではないかななどのご意見を頂戴しています。

7月17日のワークショップにつきましては、各フロアに机があれば学習室はなくてもいいのではないかというご意見や、比較的年配の方たちからは、今の図書館の3階にごさいます大きな会議室のような学習室が欲しいという方もいらっしゃいました。バリアフリー図書を使う方たちはなるべく下のほうの階で活動できるようにしたほうがいいのではないかと、地域資料として映像などを残してはどうかという意見など、たくさんいただいております。

おほしさまにいろんな願いを書いていたものにつきましては、小学生のお子さんたちは、図書館の人と本のお話がしたいとか、ケーキの本が欲しいとか電車の本が欲しいとか、お母さんと一緒に本を読みたいとかいったご意見をたくさんいただきました。

10代の方たちは、中学生までとか高校生以上とかいう形ではなくて、誰でも使える自習室のような場所が欲しいとか、推し活ができるようなコーナーが欲しいなどのように、今ま

でないものを欲する傾向がございました。

20代以上の方々、大人の方々は、今の図書館の本棚は比較的高いので、身長が低くても届く本棚が欲しいとか、車椅子のままでも使えるようになどのご意見をいただきました。また、本を通じた交流ができるスペースがあるといいということで、こちらにつきましても、現図書館は、本と貸し出しのスペースできちきちですけれども、ゆったりしたスペースが欲しいというご意見もたくさん頂戴しました。

今まで市民団体さんや高校の方、高校司書部会などから提言書やご意見などをたくさん頂戴しております。そちらの中でも、議論したり一緒に本を選べるような場所が欲しいということや、自分たちのイベントができる場所が欲しい、親子が寝転がって本が楽しめるようにしてほしいとか、お弁当を食べられる場所が欲しいとか、今ないものをいろいろ欲しているような感じでありました。

実際に意見聴取につきましては、1,000以上のご意見をいただいております。分類や分析をしているところですが、大きな学習室が欲しいという方やそういうものは要らないという方たちとか、本当に意見はまちまちですけれども、どれが一番いいかということ、四日市市としてどれを選択していくかということについては、皆さんの意見をたくさん聞きながら、それを分析しながら進めてまいりたいと思っております。

今年度も何度か、定例会等で皆様にお示しすることになると思いますが、今後ともご意見も頂戴したいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

以上です。

**○荒木政策推進部長** 説明ありがとうございました。

新図書館におけるフロア構成、ゾーニング等について考え方を示させていただくとともに、ワークショップでの意見やこれまで市民の方々からいただいたご意見をご紹介させていただきました。

事務局からの資料説明も踏まえましてご意見を頂戴したいと思います。

どなたからでも構いませんが、ご発言よろしくお願いします。

**○伊藤教育委員** 総合教育会議の中でも、市民の声をしっかり捉えて図書館を作っていくほしいということを、要望といいますか、そういう願いを言っていたと思うんですが、そういう意味で、右側にありますようにいろんなところから多くの意見を聞いていただいて、フロア構成もつないでいくと、かなりの部分、それを実現しようという構成を考えていただいているのが見えてきますので、ぜひそういう形で着々と進めていただけたらという気持

ちが全体としてはあります。

その中で、ポイントでお話しさせていただくと、バリアフリーのことが出てきます。

やはり今回も、3階以上ということになってきますので、上下の階の移動ということがどうしても伴うので、バリアフリーという意味では、ひとつリスクといえますか課題があると思うんです。ただ、これからの図書館はバリアフリーというのも必須の条件なので、このあたり、専用のエレベーターとかエスカレーターとかを構想していただいていますけれども、より適切な設備になるように、配慮されたものにしていただけたらという思いがあります。

ワークショップでも出ていますように、先ほど紹介ありましたように、四日市の地域資料を映像で残していくとか、それだけじゃなくて、ほかの視聴できるようなスペースということで、今までにないような発想というか機能が上げられていて、今後、このあたりは非常に大事になってくるかなと思うんです。地域のことについては、博物館との関係もあると思うんですが、そのあたりも詰めていただけたらなと思いました。

いろんな声の中で、私たち教育の関係でいうと、小中学生がどんな思いを持っているのかなというのは気になるところでもあるし、また、学校図書館との連携ということも随分言っていますので、教員とか保護者の方とかいった視点でどんな図書館を望んでいるのかということも、今後、声としてさらに聞いていただけたらなと思いました。

私、以前、この場でも話させていただいたことがあったかなと思うんですが、レファレンスサービスの点です。図書館として評価の高い図書館というのは、やっぱりレファレンスサービスが充実していると言われていたとか、そういう評価になるということを知っていますし、実際そうだと思うんです。

そういう意味で、レファレンスサービスをいかに充実させていくかという視点でいきますと、図書館ボランティアから、児童室担当の司書は置いてほしいということが出てきております。子ども用にレファレンスしていくという意味では重要であろうと思うし、全体として、やはり図書館の持っている資料であるとか蔵書といったもの、調べものの相談をしたりとか、探し方の相談、案内をしたりという意味では、こういった担当の方々の力量をアップする研修ということも必要でしょうけれども、人的にきちんと確保してレファレンスサービスを充実させるという発想で図書館の運営をしていただけたらなと、自分はこの辺は特に強く感じるところです。

やはり今図書館で仕事をしていただいている司書の方を基本にしながら、そのあたり、さ

らに充実したレファレンスサービスをやっていくかということを詰めていただけたらなと感じております。

以上です。

**○荒木政策推進部長** ありがとうございます。いずれも重要なご意見をいただいたと認識しています。

大きく分けて4つぐらいご意見をいただいて。市民意見をきちっと聞いてほしいという意見と、小中学生の意見も重要であるので今後聞いていかなければいけないかというご意見であったかと思います。また、バリアフリーという意味できちんと適切に対応してくれというご意見と、地域資料の保存。映像で残していつてはどうかという斬新なご意見というか、これまでにない発想も、きちっと意見を聞く中で検討してほしい。最後には、運営面についてレファレンスサービスの機能をきちっと充実していつてくれというご意見であったかと思います。

ありがとうございます。

順番に、豊田委員、よろしく申し上げます。

**○豊田教育委員** 今の伊藤委員が最後に言われたレファレンスサービスは、やっぱりせっかくのところなのだと思います。

もう1個、今回せっかく新しくなって、考えられていると思うんですけども、人でなくともいいところ、司書さんでなくてもいいものに関しては、やっぱり業務内容を整理して、司書さんが司書さんの仕事に特化してちゃんとサービス提供ができるようなことを整理していただけるといいのかなと。

そこの中では、ICTの活用というところが当然考えられていると思うんです。特にお若い方だと、人を介さずにそっちで情報を取って自分で動いていくということもあるかとは思いますが。人がいないとうまくいかない、資料のことでいろいろ、小さい子どもさんでも図書館の人とお話ができるようにしてほしいというご意見もあるので、その業務のすみ分けというか。充実はとても大事ですけども、無駄のないように、精選された形で運営がなされていくといいなと思います。

階が何階かに展開していくので、そこが利用者によくわかるようなところは、多分ICTの活用で随分いけるのかなとは思いますが、そういうふうにサービスの充実をしていつていただきたいなとは思いますが。

以上です。

**○荒木政策推進部長** ありがとうございます。

伊藤委員と同様に、レファレンスサービスの重要性ということで。

反対に、そのサービス、機能を充実させるために、司書でなくてもできるものは、きちっと業務の棚卸しをして、ICTとかを活用してサービス提供、充実を図ってくれというご意見をいただいたと思っています。

それともう1つ、多層階にわたるので、その案内は非常に重要だというご意見をいただきました。

ありがとうございます。

数馬委員、よろしくお願いします。

**○数馬教育委員** 伊藤委員と豊田委員にほとんど言っていたという感じですが、私も、特に図書館の建物が立派になって物がよくなる。人と物で、図書館の場合だと物は本になりますから、人と物というのが事を動かしていくとしたら、図書館の本が倍になったら、それに携わる人も単純に言うとは必要になってくるのではないか。そのくらいしないと、せっかく蔵書が増えて、それを市民に対してすぐに対応できるような専門の方の充実というのがどうしても望まれると思います。だから、本があったら司書がいるというような感じで。先ほどの豊田委員も、業務内容によっては司書さんでなくてもというのは本当にもっともな意見で。

例えば、学校で、教師でなくてアシスタントでというのが出ているように、そういうアシスタント制みたいなものも取り上げて。ただ、本のことをわかる人でないといけないので。誘導したりとか返却とかいうことはできるでしょうけれども、やはり本そのものを理解していこうとする気持ちのある方でないとそこところは務まらないと思いますので、それを加味して、人の手配というのを大切にしていきたいと思います。

**○荒木政策推進部長** ありがとうございます。

やはり運営面でご心配いただいているということで。本が倍になると、それにきちっと見合うような対応ができていくのかというご心配かと思います。こちらについては、きちっとレファレンスサービスの充実、司書のキャリアアップの面でのご意見だったかと思います。

ありがとうございます。

堀委員、お願いします。

**○堀教育委員** 私、新図書館の第1回のワークショップに参加させていただきまして、本当にいろんな意見が出ました。自分のグループの中だけでも、本当に真反対の意見も出ていた



と思います。吹き抜けは要るかどうかとか、学習室は要るのかどうか。人によっても、使っている年代によっても全然意見が違ったりすると思います。そういうときにやっぱり最後の決め手になるのは、司書さんとかそこで働く方々、プロの声で決めてもらっていくのがみんなの納得になるんだろうなと思いました。

そのワークショップで私が一番ぐっときたのが、人と人であったり、人と本がつながれる場所になってほしいという期待値の高さであったかなと思います。自分の学習だけじゃなくて、本を通して司書さんとだったり、毎日通っているような人たちがちょっと顔を合わせて会釈するようないい雰囲気づくり、居場所みたいなものも期待があるのではないだろうかと思いました。

伊藤さんもさっきおっしゃっていたように、小中学生の声はぜひ聞いてみたいなと思いました。完成したらきっと小学生たちが行くだろうし、もしかしたら学校から社会見学みたいな形で行くことになるのかなと思うんですけども、エントランスを入った瞬間にわーって、わくわくするような空間であってほしいなと思いました。

私なんかは子育て世代で、そうやって見てしまうんですが、子育て世代が子どもを連れていく。その子どもが大きくなって、休みの日だったり、暑い夏の日だったり、夏休みの期間中に、自分も連れていってもらっていたし子どもを連れてまた行こうかなというような、長い目で見て、それこそ今の図書館も長い月日が経っていますけれども、50年後もわくわくするような空間であってほしいなと、期待を込めてワークショップに参加させていただきました。

以上です。

**○荒木政策推進部長** ありがとうございます。

多方面からご意見いただいたと。一つは、居場所づくりというか、居場所でいい空間であってほしいということを期待されておるといふご意見だったと思います。やはりわくわくするような図書館であってほしいということだったかなと思います。

ワークショップに参加されたということで、ありがとうございました。

教育長、よろしく願いいたします。

**○廣瀬教育長** 駅前に今度新しく建設していくということで、駅前図書館としては後発になるので、内容はどう考えたらいいのかなというところもあるんですけども、今のお話を聞いていると、例えば映像なんかを視聴できるスペース、スタジオという新しい意見も出されて、こういったところを取り入れていけると新しいだろうなと思いますけれども、先ほど

の堀委員のお話とかを聞かせていただくと、人と人のつながりとか、人と本がつながるとい  
うことは変わらないんだな。ここは大事にしていく。図書館に来て、落ち着いていい雰囲気  
で本を読んで、いろんな人の疑似体験やいろんな価値観に触れられるといったところは変  
わらない、不変のところはしっかり残していける。その雰囲気をつくることこそが、外側の  
新しい施設としてぜひいいものを箱としても作っていききたいし、人と人、人と本をつなぐこ  
とができる司書の役割というのも重要なのかなと思っています。

私もこの間、『ながいながい図書館の話』の中で、改めて自分が中学生のとき毎日図書館  
へ行っていた理由は、坂倉加代子さんの話を伺って改めてわかりました。やっぱりそこに司  
書さんがいて、いつもにこにこして迎えてくれる。ここの子どもの意見にもあるように、児  
童室にいていつも頼れるというか、声をかけても答えが何か返ってくるという、人と人のつ  
ながりを大事にされていたんだな。それで毎日足を運んだんだなと、50年経って改めて気  
づかせていただきました。人が集う雰囲気、本を読まなくても別に注意はしないし、来てく  
れることで彼らは本のシャワーを浴びてくれているのでというところで、来てくれること  
を大事にしていたというそんな温かいお話も聞いたので。斬新な人目を引くものである中  
でも、そうやって普遍的に変わらない、人と人、人と本がつながるような図書館になるとい  
いのかなと。私も大変楽しみにしているところですし、責任があるなと思っています。

以上です。

**○荒木政策推進部長** ありがとうございます。

教育長からは、決意と申しましょうか、こういう図書館にしていきたいという思いの意見  
をいただきました。

駅前図書館としても特徴を出していきたいというようなことがあったかと思います。

それと、新しいもの、箱づくりは一生懸命やっていくとともに、その中身ですね。人と人  
のつながりであったり、やっぱりこれは普遍的なもので、今も昔も今後も継続していくもの  
だと。そういう中身も大切にしていきたいというご意見だったと思っています。

ありがとうございます。

最後に市長からよろしくお願いします。

**○森市長** 図書館ですけれども、近鉄グループさんとの覚書締結で、いよいよ本格的に今年  
度基本設計に入ってきているところで、形が見えてきました。これまでは箱自体が決まってい  
なかったもので、中身についてじっくり議論する機会はなかなかなかったんですけども、  
今年度は、基本設計と同時に、これからの図書館についてしっかりと市民の皆さんの意見を

聞いていこうという年度になっておりまして、私が思っている以上に現場は、ワークショップであるとか市民の皆さんに聞く機会をつくってもらっていますので、大変多くの意見が集まってきていることは非常にうれしいなと思っています。様々な意見があるんですけども、皆さん、いい図書館にしたいという思いは一つですので、何とかいい形に仕上げていくことができればと思っています。

第3の居場所、サードプレイスとしても図書館は機能していかなければいけないので、直接本をとる方じゃない方もどんどん引きつけて、包み込んでいくような図書館にした結果、本に結びついて、本が様々なご縁をつくっていくという場所も必要かなと思っています。

これから具体的な中身について深めていただけるんでしょうけれども、今日、教育委員の皆様方も、司書さんへの期待というのは非常に大きなものがあるなというのは改めて感じましたので、こういった司書さんの能力を十分に発揮できるような仕組みはどうかというところもしっかりと掘り下げていきたいと思っています。

**○荒木政策推進部長** ありがとうございます。

一通り委員の方のご意見をいただきましたが、ほかに、言い残した部分等々あれば伺いたいと思いますが、よろしいですかね。

よろしいでしょうか。

またいろんな面で、今後も事務局を通じてご意見いただければと感じてございます。

### **3 児童生徒への持続可能なきめ細かい指導・支援のあり方について**

**○荒木政策推進部長** 次の項目、事項書3の児童生徒への持続可能なきめ細かい指導・支援のあり方についての項目に移りたいと思います。

全国的にも、学級編制基準の引き下げとか教員のなり手自体の減少等によりまして教員不足が深刻化してございます。本市におきましても、この問題、課題については、喫緊の課題と捉えてございます。

そこで、本日でございますが、児童生徒への持続可能なきめ細かい指導・支援のあり方をテーマに、教員の人材不足を踏まえた教育施策についてご議論いただければと思っています。

それでは、事務局から資料の説明よろしくをお願いします。

**○稲垣学校教育課参事兼課長** 資料2、資料3につきましては、教育委員会学校教育課及び教育支援課から説明させていただきます。

具体の指導、支援のあり方の紹介の前に、国または本市の現状や課題を説明させていただきます。

1 番には、国の流れとしまして、(1)、(2) は6月16日に閣議決定されました次期教育振興基本計画を上げさせていただいております。

この教育振興基本計画は、予測困難な時代における教育の方向性を示す羅針盤でして、そこには、今後の教育政策に関する基本的な方針が①から⑤の表現で記載されております。

中でも特に注目したいのが、④教育デジタルトランスフォーメーション(DX)の推進です。コロナ禍も相まって、本市はGIGAスクール構想を加速度的に推進してまいりました。また、(2)には、7月10日に発出されました「児童生徒の自殺予防に係る取組について」の文科通知では、1人1台端末を活用した健康観察や教育相談についても言われております。

以上のように、教育活動、学習面、あるいは健康観察や子どもの見取りにおいて教育のDX化が求められておりまして、市として、その推進を確実なものとするのが、教育するなら四日市の大きな前進になるものと思われまます。

さて、2には本市の現状と課題としまして、深刻な教員不足の現状をお示ししました。このことは全国的な課題でもあるわけですが、本市においても状況は一致します。

図1には、年次以降して学級編制基準が40人から35人に引き下げられることによる学級数の増加と教員不足を補填する講師の登録者数の減少の様子がグラフで示してございます。また、表2には、産休・育休・病休等を補う講師の不足状況、表3には、平成23年から実施してきましたよっかいち30人学級編制の実施率を示してございます。

こんな状況、現状を踏まえまして、冒頭の次期教育振興基本計画に沿った教育のDX化の推進について、具体的方策を次ページに示してございますので、ご覧ください。

**○坂下教育支援課参事兼課長** 引き続き、教育支援課からご説明申し上げます。

資料は次のゴシックの3番、きめ細かな指導・支援の具体的方策の検討例というところで

この前提に少しイメージしていただきたいですけれども、現場では、例えば35人掛ける3学級、105人の学年があるとします。これは実際に1人講師がつきますと、26人と27人の学級の4クラスに分けることができる。つまり、1人講師が増えることにより、35人のクラスが、26人とか27人の少ない児童生徒数で構成することができる。

これによって、例えば朝をイメージしていただきますと、教員が学校に行きますと、35

人分の漢字ドリルのノートとか計算ドリルのノートあるいは日記風のデイリーライフとかいろいろな商品名がありますけれども、そういうものが山積みされている。それが26人とか27人に軽減される方策があったわけですが、現実にはそれが実現できない。となりますと、やはりICTなどの力を借りながら人手不足を補っていく方策でございます。

そして、今から手段1、手段2、手段3と、3つに分けていろいろなICTを使った補いを進めていこうというご提案でございます。

まず最初に、手段1は、AI学習アプリの積極的活用です。

例えば、「鳥」という漢字をタッチペンで書いていくときに、書き順が違うと、そこではねられます。一回止まりますので、もう一回書き順を一から書き直さなければいけないというアプリが既に入っておりますけれども、これを引き続き活用することによって、朝、35人分の漢字ドリルノートが手書きで出されておることが、電子上でどんどん子どもたちがやっていけるんじゃないか。できる子はどんどん進めていくこともできますので、そういうようなAI学習アプリの積極的活用によって教員の時間の創出ができますし、また、ノートを見ている時間の代わりに、今度は子どもたちと接する時間が増えることとなりますので、そういう意味で丁寧な見取りも実現できるのではないかと考えております。

続いて手段2、デジタル採点システムの導入ということで、先日岡山放送でニュースにもなりましたし、教員のインタビューなんかもありました。1時間の採点が20分になりましたという紹介もされておりました。今日はその映像は飛ばしますけれども、イラストで簡単にご紹介いたします。

要は、子どもたちが日々テストに取り組む採点用紙を、このように高速コピー機でスキャンしましてパソコンに取り込むことができるデジタル採点システムです。実際には、子どもたちの答案に赤丸とかあるいはバツをつけて印刷した状態でどんどん返すことができる。つまり、PDFで取り込んでいますから、そのPDFのコピーに赤丸とかバツとかを印刷して返すことができるシステムです。

さらに、右下にExcelの細かい表がありますけれども、細かく採点した結果、1つ1つの問題の平均点なんかも瞬時に出てまいりますので、こういう処理が簡単にできるソフトになっております。

ということで手段2についてご説明しましたが、デジタル採点システムを使うことによって、採点の処理、成績の処理まで簡単に行うことができるというものでございます。

続いて手段3、校務支援システムのさらなる活用ということで。現在も校務支援システム

が導入されておりまして、ここでは、子どもの出席とか欠席が入力されますと、それが自動的に学期末の成績処理とかあるいは学年末の処理に使えるというものでございますが、これをもっと進めたいということです。

例えば、6月28日に愛知県瀬戸市のある小学校を視察してまいったんですが、職員室の前にはこのように大きなモニターがあります。子どもたちはもともと入室できませんので、これは教員しか目にすることができません。

もう少し細かく見ていきますと、欠席したあるいは遅刻した子どもたちの保護者からの連絡が全部一元化して入っております。こういうふうに一元化していろんな情報を処理することができるソフトをどんどん入れていきたいというものです。

もう少し見ていきますと、今度は、例えば学級ボードというものがございます。子どもたちの顔写真を入れておきますと、1人1人の情報、例えばその子が最近どれくらい休んでいるとか、あるいは右にはダミーで成績、5、4、3、2、1の評定も入っていますけれども、こういうものがわかる。

右下の小さい囲みですけれども、今日の計算ドリルの様子。どのくらい計算ドリルをやっているか、あるいはどんな書き込みをしているかということまでわかる。いわば個人の電子カルテが導入できるというわけです。

もう少し見ていきますと、これは実際に瀬戸市の情報ですけれども、こういうふうに職員室である子どもの情報について知ることができるということです。

さらに、スクールライフノートというオプションが瀬戸市では導入されておりました。これは、子どもたちが日々感じたことなどを、例えば天気予報のマーク、晴れとか曇りとかいうもので、今日は曇りでしたとか、今日はお母さんに叱られて雨でしたとかいうものも先生に送ることができる。それに対して教員が、ああそうでしたかということでスタンプ風に、スマイルなどのマークを送ることができる。そういうやり取りを電子上でできるというものです。子どもたちと教員をつなぐ電子上のやり取りのノートです。

そして、もう少し進みますと、瀬戸市は実際に2年生の子が今日の4限分の授業を振り返ってどうだったかということを入力しています。晴れのマークとか曇りのマークとかでわかったかどうかとも表現しています。

そして、これを入れていくとどうなるかというと、教員のタブレットにはずらっと一覧で、誰が今日の勉強について晴れマークだったか、あるいは曇りだったかということも出てまいります。

これは2年生ですから、1日のうち1回打っていましたが、これが5年生6年生になると各教科の授業、1回1回の授業に対してこういう振り返りを書いていました。振り返りを書かれると、教員としても授業改善につながる。さっきの授業をすぐ振り返ることができるというものです。

その副次的な効果として、理科の専科の先生がさっきの自分の授業の板書の写真を撮っています。この板書の写真を撮ると、即、先ほどの子どもたちが書いた振り返りの横に黒板の写真も保存されますので、子どもたちの振り返りもすぐにわかるし、自分の授業の黒板の写真も入れて振り返りもできるというシステムが、この校務支援システムを発展させた形となります。

ありがとうございます。スクリーンは以上です。

このようにして校務支援システムのオプション機能をさらに導入することにより人手不足を解消し、なおかつ、子どもの丁寧な見取りを進めることができるのではないかというご提案です。

以上です。よろしく申し上げます。

**○荒木政策推進部長** ご説明ありがとうございました。

新たな教育施策として、もっとICTを活用して、きめ細かな教育指導や質の向上、デジタル化による教員の業務負担軽減につなげていきたいという説明であったかと思います。

事務局の説明を踏まえまして、皆様からまたご意見いただきたいと存じます。

いつものごとく、伊藤委員からよろしく申し上げます。

**○伊藤教育委員** 盛りだくさんなので、まとまっていないところが多いですけども。

教育デジタルトランスフォーメーション、いわゆるGIGAスクール構想の一番の目的は、やはり誰一人取り残さないように、個別最適化された、また創造性を育むといった学びを実現する取組を目指していると。まずこれを大前提として自分たちは抑えていないといけないなと思うんです。これを使って子どもたちの最適な教育を提供していくことだと思っています。これを活用することによって、いわゆる働き方改革にもなるということは間違いありませんので、そのあたりの枠組みは、私はぜひ今後進めていかないとはいけません。

私自身が現場を離れて何年も経っているんですが、進んでいるんだなとか、変わってきているなということを強く感じるんです。ただ、この手段1・2・3を具体的に紹介してもらって、これならば、かなり業務の軽減になる、いわゆる時間短縮に結びつけられるとい

うことを強く思います。

今まで手でやっていたこととか、いわゆるいろんな資料を見てやっていたことが、AIとかこういう技術を使って、システムを導入してやっていけるということで、当然時間の縮減にはなるんですけども、やはりデジタルを入れていくという意味での弊害というか、気をつけなきゃならないことは、この3つが結構簡単にどの先生も使いこなせるようなレベルのものかということはチェックしていかないといけない、それでないならば、それをカバーするような何らかの対策は考えなきゃならない。

それからもう1つは、これを使ったから教育を本当に進めることができるのか。例えば、採点システムを使っていいものと、やはり1人ずつの子どもたちの書いたものをしっかり見ていくということも、ハイブリッドというか併せ持って、選択しながらやっていかないと。デジタルでこうやって採点されたときに、子どものデータは確かに得られるんだけど、この子が本当にどんな歩みをしながら学んでいたか困っていたりするということは、現実に子どもが書いたものとか記録したものを実際に見ながらしてこそやれることもあると思うんです。

全てにそれをやっていたら膨大な時間がかかるというのも、経験としてあります。そういう中で、やはりこれを入れながらいかに有効に使っていくかということが、今後、入れたら入れたで問われていくだろうなという気がします。

一方、例えば校務支援システムでいいますと、これが入ってきたときに、いろんな処理、名簿とか出欠とか、こんなものが全部つながっていて、それまで1種類ずつやっていたものが、全部一瞬にして表とか記録ができてしまうことはすごい便利だという声をいっぱい聞きました。そこへ加えて、子どもの情報をこうやって加えていくということで、ただ単に今までのデータだけじゃなくて、いわゆる子どもの現実の声みたいなものをこれから受け取っていくということも含めて、ぜひこういうものをうまく使っていただけると。

先ほど言いましたように、うまく使うということが大事だと思いました。やはりこういうことを進めていかないと、一番最初に教員不足というのがありましたけれども、働き方改革を進めていくことで、教員に対するイメージ。そもそも、労働環境であるとか待遇であるとか、長時間労働である。いわゆるブラックな職場というイメージがついてきてしまったところがあるので、これを解消するためには、こんなことを入れながら、教師というのは違うんだということを進めていくことが、人材不足といいますか教員の不足というものを一步一步進めていく上でどうしても必要なものであるなという思いを持って聞かせてもらいまし



た。

感想的なことが多いです。

**○荒木政策推進部長** ありがとうございます。

いろいろ気をつける点とか、いろいろご意見いただいたと思います。

G I G Aスクール構想の根本のところ、児童生徒に向かい合う時間を創出するということとか、個別最適な学びの実現ということについては、I C Tを活用して目指していくべきところはきちっと押さえていく必要があるということだったかと思います。

具体的な取組はかなり業務の効率化につながるけれども、その上でやっぱり気をつけておくべきこともあるんじゃないかと。このソフトを導入しても、どの先生も、皆さん本当に使いこなせるのか。使いこなすまでもに一定の時間がかかるのだったら、それに対する対策もしていくべきではないかといったこととか、デジタルとアナログというか、1人1人生徒さんの状況を見るという、両方を有効に、うまく融合しながら活用していく視点も必要ではないかということであったかと思います。

ありがとうございます。気をつけておくべきこととか、いろいろご意見いただいたと思っています。

豊田委員、よろしくお願いします。

**○豊田教育委員** 私も、伊藤委員が言われたことはもっともだなというか、本当にそうだと思います。

そもそも、教員が少なくて難渋しているところは、市だけで解決するものでないと思うんです。

教育学部にいる学生の大半は、何らか教育に興味があって、そこに進んで学ばれている一方、その後、教員試験を受けようかなというところがどうもうまくいっていないのかなと感じているんです。そういう人たちが、やっぱり教員っていいな、小学校の先生をやろう、中学校の先生をやって子どもたちに向き合おうとなるような、ちょっと長い目で見た人材づくりというか、教員として引き込めるように今の職場環境を整えていく。司書さんの話じゃないですけども、教員なら教員の仕事をできる環境、子どもたちに向き合える時間の確保というのを強化して、例えばそこを四日市がI C Tを使いながら先進的にやっているということを強く前へ出してアピールして、結果、子どもたちの学力も伸び、情緒面も育っているというアウトカムを出せると、煩雑なことじゃなくて、教員としてやろうかなという学生たちがそこから上がってきてくれると思います。

そのために、事務局が提案されているようなものを使っているということをそういう学生たちにもアピールして、それから現場の先生方がそこで生き生き働いているということが大事かなと思うので、その環境を整備していく。

伊藤委員が言われたように、新しいシステムが入ったときにすぐなじめる方もいらっしゃる、そうでない方もいらっしゃる。そこには、教員じゃなくても、そのことをできる人を充てていただく中で変わってくる。例えば、今実際にアシスタントを入れていただいて学校の中の業務が整理されているように、アシスタントの使い方をまた変えるとかいうこと。先生たちが入力されたデータをずっとにらめっこしていて、子どもたちの顔を見ていないようなことのないように、データに振り回されないようにする。データはうまく活用するものであるし、ICTも活用するツールではあるので、やっぱり人と向き合う時間をちゃんと確保して、四日市の学校ではこういう教員の仕事ができるんだ、子どもたちもこういうふうになっているといけるような今のシステム導入とか運営のあり方というのを考えていけたらいいのになと感じました。

**○荒木政策推進部長** ありがとうございます。

長い目で見た人材育成とか、目的とするところをきちっとご意見いただいたと思っています。

それと、伊藤委員と同じように、使いこなせるか。そこへの人材というか、その業務分担をどのように。先生でなければできない仕事に専念してもらうためにもというご意見であったかと思います。

それとやはり一番重要なポイントかなと思うんですが、データに振り回されないということで、やはり本来の目的、人と向き合う時間をきちっとつくっていくというご意見だったと思っています。

ありがとうございます。

数馬委員。

**○数馬教育委員** 個人的なことをまず申し上げますが、私は産業人です。まだ現役で企業で働いております。何回かにわたり今回のこのテーマが教育委員会で討議されていたんですけども、簡単に申し上げると、学校はどうしてこんなに遅れているんだろうということが産業人としては出てくるんですね。

この10年ぐらいで、複数の従業員がいるところのシステムは、タブレットをみんなに持たせてのやり取りが当たり前になってきています。

私どものところも、中国とインドネシア、四日市の中でも縫製工場と物流と企画と店舗と分かれていますし、東京にも店舗があるんですが、それが一瞬でみんなで会議もできますし、何もかもが伝えられるようになっていきます。それが産業のところでは当たり前のことになっていますので、どうして学校はとっていたんですけれども、やはり学校は、教師の方たちも人ですが、相手が人だからこそ、こういう機械の導入というのが、デジタルの導入というのが大変なんだなというのを、何回かにわたり私は感想として持っているんです。

だから、こういうふうにきめ細かく討議していくということは非常にいいことだと思っています。会議が進むたびに、よき形というか、学校でどういうふうに使われていくのかが見えてきて、とてもうれしくなっています。教師になる若い人たちが少なくなっている中で、四日市がこれを成し遂げたら、教育するなら四日市というフレーズを本当に使えるようになると思うとあれですが、教師は県がというのはわかっておりますが、そういうふうな雰囲気をも市民全体が持てるようになってくると、また、学校でこういうことが行われるようになると、保護者にも直接関係してきますので、市民全体もそれを理解していくことになって、とてもいいことだと思っています。地道に、ここまで来ているので焦らずに、いい方向で成し遂げていけたらいいなと思っています。

感想です。

**○荒木政策推進部長** ありがとうございます。

やっぱりきめ細かく十分に検討する中できちっとデジタル化を進めていってほしい。その上で、教育するなら四日市となっていってほしいというご意見だったと思います。

堀委員、お願いします。

**○堀教育委員** よっかいち30人学級編制をまだまだ諦め切れていない保護者です。ぜひ手厚い人数でやってほしいというのはもちろんあるんですが、教員不足は、言ってもどうしようもないところもあるので、ICTの活用には本当に期待しています。AI学習アプリやデジタル採点システム、先生方の負担を減らすという点では本当に効果があるんだろうなと思います。

私、小さい頃を思い浮かべて、博物館の「博」は、最後の点が要ったっけ要らんかったっけと思って、テストのときに、点を薄く書いたり、ちょっと消してみたりとかしていたのを、この採点システムではどんなふう採点されるんだろう。先生も、こいつ悩んどったけど間違えとるなとかいう無言のやり取りをどういうふうに取り込んでもらえるのかなというのをちょっと思ったりもしました。

校務支援システムに関しても、豊田委員もさっき、大切なのは顔を見て関係を築くこととおっしゃっていて、やっぱりあくまでツールとして活用しないといけないと思います。子どもにとってはやっぱりこういうのが当たり前になってくるし、とても使いやすく身近なものになってくると思うんですが、それでも、例えば子どもがSOSだったり、今日はちょっとしんどかったなという気持ちを発信しやすいものであってほしいなと思います。

うちの子でいうと、「夏の一行日記」を最後の1日でだーっと、その日の気分で書くんですけども、そういう使い方にはなってほしくないなと。形だけじゃなくて、じっくり自分を内省して、今日の気持ちはこういうことだった、先生に聞いてほしいことがあるからここに一言書くんたという使い方を徹底してもらえたらなと思いました。

以上です。

**○荒木政策推進部長** ありがとうございます。

I C Tにはかなり期待するということで、あくまでもツールとして活用してほしい。その使い方ですね。やっぱり使い方を使いやすくしてほしい、そういう環境を整備してほしいというご意見だったと思います。

もう1点デジタル採点システムの件は事務局わかりますか。

**○坂下教育支援課参事兼課長** これはどこまでの精度がわからないですけども、現実的には、紛らわしいものは先生が見て、マニュアルで丸とかバツとかをつけるということになると思います。

**○荒木政策推進部長** その辺は、実際に先生がじかに、アナログで見るといった感じですか。

**○廣瀬教育長** デジタルは容赦なしにはねます。

チェック精度が3段階で、一番厳しいのにすると、止めはねがバツされて、0点でした。

**○荒木政策推進部長** その辺はなかなかごまかしが利かないということでございますので、よろしくをお願いします。

**○堀教育委員** 優しさをね、人の優しさ。

**○荒木政策推進部長** ご意見ありがとうございました。

それでは教育長、よろしくお願ひいたします。

**○廣瀬教育長** デジタル化が人員不足の解消には直結しないというのは前提にあります。やっぱり人間ですから、人と人の中でしか子どもは育たないと思っていますので、人がおったほうがいいのは間違いないですけども、そういった意味で学校はなくてはならない場

であると考えています。

ただ、今の先生方の働き方を見ていても、勤務時間をどれだけ縮減できるかというのは大きなポイントになってきますので、こういったデジタルを入れて小さな業務の効率化を図っていくしか、今はないのかなと思っています。

そういった意味では、こういった機器を導入させていただくことで、少しずつの時間の積み上げを子どもに向き合う時間に変えたり、創造的な学校行事だったりクラスの間取りであったり、探究的な学習であったり、そういったものをつくり込むには一定の時間が必要ですので、そういう細かい効率化をまとまった時間に積み上げていくといったものしかないのかなと思っていますので、ぜひこういったICT機器の活用については現場にも理解いただいて進めていきたいと思っています。

ただ、現場に理解いただきたいという思いは、新たなシステムを導入すると、また新しいものが入ったという一時的な負担増とか負担感増になっていくので、このあたりは、これを導入する趣旨もしっかりと説明させてもらいながら、有効に活用していただけるような取組にしたいと思っています。

今もAIの学習アプリを導入しているんですけども、今までの習慣がなかなか抜けていなくて、やっぱり紙のドリルで何回も書かせる。それを毎日丸つけをするという習慣からなかなか脱却できない。デジタルドリルをうまく使ってもらって、書くのは、3回だけ丁寧に書いて、それを確認する時間を短縮するといったやり方の工夫というのはまだまだ浸透していないところですので、そういった使い方についてはきちんと現場と共有していけないといけないなと思っています。

金曜日に堀委員と2人で文科省の教育委員の研修会に参加してきましたんですけども、国としても勤務時間の縮減というのは大きな課題としていまして、授業時間数を切り詰めないと決定的な改善につながらないということで、1,015時間以上授業をしている分をどうやって削るかということを改めて、この令和5年度後期から取り組みという方針を出してきます。6年度からは1,015が標準時間ですので、それを超えているところについては授業時間を削減して先生方の業務時間を生み出せということも言ってくるので、そのあたりの準備をしながらも、こういった業務の効率化を図れるようなICTツールであったり教員以外の人材の活用の仕方についてはもう一度現場とも話し合いながら整理をしていきたいと考えています。

以上です。

**○荒木政策推進部長** ありがとうございます。

人は重要と。いくらデジタルを入れたって、人材不足には直結しない。あくまでも先生と生徒という人の関係を重視していきたいということであるとか、やっぱり先生の業務の効率化は本来の業務にきちっと当たってということで、システムを導入して、その使い方ですね。教育長もおっしゃられました、やっぱり現場の人が、使い方が本来の趣旨に合っていなかったりすると駄目だということから、その辺はきっちりやっていくということだったかと思います。

あと、文科省の研修会へ行ってもらったことも、勤務時間の縮減ということもご説明いただいたところでございます。

ありがとうございます。

最後に市長からよろしくお願いします。

**○森市長** 様々なICTの技術を使ってやってもらうのはすごくいいことだと思っています。

かねてから、教育するなら四日市、そして教員するなら四日市という言葉もありましたけれども、何とか先生方の働き方改革に四日市は前向きに取り組んでいきたいということで、校務支援システムとか業務アシスタントの配置、または高性能のコピー機の導入とか、現場への様々な投資はしてきたと思っています。その延長線で、今回、いろんなアプリであるとかシステムの導入に至っている、これは大いにやっていただきたいと思うんですけども、やっぱり市としても教員不足というのは非常に深刻な状況で。全国的な話なので、四日市だけではないですけども、できる限り四日市で働いてもらっている先生の現場の負担感をなくしていきながら、どうせなら四日市で教員したいよねと多くの先生に言ってもらえるように持っていきたいとは思っているから、こういう先進的な取組というのは大いに歓迎したいと思います。

一方で、教員不足をどう解消していくかは、県が一義的な責任を担っている、四日市だけで何をしていけばいいのかわからない。こういった現場の負担感を軽減していても、結局県職員として採用されて全県下で勤めるという構図なので、どういうふうにしていけばいいのかなというのはすごく悩ましいところではあるんです。

今、教員採用試験のときに、四日市というのは人口的には5分の1か6分の1ぐらいの割合だと思うんですけど。子どもになってくると割合はもっと増えてくると思うんですけども、なっている先生というのは、四日市の方はどれぐらいなっているかわかりますか。

どちらかというと、四日市の先生が結構増えて地区外へ行っているのか、市外から四日市の教育現場へ来てもらっている人が多いのか。どんな感じですか。

○**稲垣学校教育課参事兼課長** 四日市出身の方が四日市で先生をしているというのは、他市出身の方に比べれば圧倒的に多いわけですがけれども、それだけでは賄い切れない状況です。他市に配置されている四日市出身の先生方を全部集めたとしても、埋まり切りません。

○**森市長** 埋まり切らない。

○**稲垣学校教育課参事兼課長** はい。

○**森市長** 助けてもらっている側。どっちかというとそうなんです。

○**稲垣学校教育課参事兼課長** はい。

○**森市長** もっと市内での希望者を増やさなあかんということですね。

それにはいい先生がいっぱい。学校現場で、あの先生みたいになりたいという先生が多くなってもらわないと。

○**伊藤教育委員** 小中学生で先生になりたいという、いわゆるなりたい職業のランクはまだまだ高いです。それをいろんな意味で、働き方も含めて、先生に対するイメージを上げる。保護者も含めて地位を上げていくようなことをやっていけば、後々つながるということは期待していいかなと。今はそこへいろんな情報が入ってきますので、マイナス要因が。

○**森市長** 要は、先生の疲弊感をなくすというのは大事ですね。先生に生き生きと働いてもらおうと、輝いてもらおう。

○**伊藤教育委員** そうです。先生を見て、ああいうふうになりたい、仕事したいというのをどれだけ醸成できるか。

○**森市長** これも一応それにつながっている。

○**伊藤教育委員** そうだと思います。

○**森市長** 一過性じゃなくてね。将来の教員志望者を増やしていく。

○**廣瀬教育長** 本当に細かい業務の積み重ねで、何かわからないけれども遅くまでかかるというのは、事実あると思うんですよね。そういうのが少しずつ整理されて、1日30分でも確実に減るのであれば大きいなと思います。

○**荒木政策推進部長** 現場としては、業務は年々軽減されているという声とか。

○**廣瀬教育長** この間も教育委員会の中で話されていたのは、私どもが職場におった頃と比べたら格段の整理はされているんですけども、この2～3年で新しく教員になった者についてはこの設定が当たり前なので、そのところから教員の働き方改革ということが進

められているので、なお進めないと実感を伴わないという現状はありますね。今ある環境が当たり前になっているので。

**○荒木政策推進部長** なるほど。

やっぱり新たに先生になられた方は、これは教員のやる仕事じゃないよねとかいう声はあるんですかね。

**○稲垣学校教育課参事兼課長** 先ほど教育長申し上げたとおり、今教員になってくる人たちというのはこれが当たり前。その中で今進められているのが、業務の精選という格好で、これは本当に要るのかというのが現場の中ですごく多く議論されているところです。

その中であって、例えばコロナ禍で一旦立ち消えになってしまっていた地域活動、地域とのやり取りというようなことも、今なった人からすれば、そんなことを先生がしていたんですかみたいなどころです。

だから、業務の精選の真っただ中に学生から教員になった人にとっては、今まさにこれが必要なのかということをお問自答していると。教員ってこんな仕事やったんやと、自分が思っていた感じと大分違うということと相まって、若くして教員をやめてしまうとか、メンタルを病んでしまう方が増えてきているのも事実です。

**○森市長** 今、再任用の先生って、残り率はどれぐらいですか。定年の後で継続してもらおう先生は何割ぐらいいるんですか。

**○稲垣学校教育課参事兼課長** ほとんど100%です。おやめになる方も数人いますが、大方は再任用。その勤務形態が、常勤で勤められる方と、短時間勤務に替わる方は多いですけども、再任用をしないという先生はほとんどいません。ほとんどの方が再任用を希望されます。

**○森市長** 短時間の方は半分ぐらいいるんですか。

**○稲垣学校教育課参事兼課長** もっといます。短時間になる方のほうが多いです。

**○森市長** 定年が伸びますから、そうすると人材は大分確保されるんですか。短時間が減りますもんね。

**○稲垣学校教育課参事兼課長** そうですね。

**○堀教育委員** しんどいと思います。

うちの母親、教員をやっていて、50代後半ぐらいから4階の教室まで上がるのが無理と言っていました。生徒たちも気を使ってくれるんでしょうけれども、ご老体に鞭を打たせたら駄目というのが、うちの母の提言でございます。



○森市長 四日市は3階まででしたっけ。

○廣瀬教育長 一部4階まで。

この間、金曜日の研修会でちょっと改めて思い直したことがあって。文科省の課長が言うには、その話を聞いてそりやなと思ひ出したんですけども、卒業式で感動の涙を流せる仕事ってあんまりないよという話を言うんです。文科省の課長は行政の人なので、文科省で涙を流すことって、うれし涙なんて流すことなんてないと言っていました。

そういう感動の涙を流せる仕事ってほかに何があるんだろうと考えたときに、やっぱり僕らはそういう仕事をしてきたんやなというので、改めてそりやなと思ひてしまつて。そのあたりのアピールは不足しておつたんでしょねと思うので、教育委員会としても広報活動とか、ホームページも新たに整理して、いい発信をしていく必要があるのかなとは改めて思つたところですよ。

○荒木政策推進部長 よろしいですかね。

議論も尽きないところでございますが、人材不足の根本の問題もさることながら、こういったデジタル化の活用について議論いただきました。

#### 4 その他

○荒木政策推進部長 とりあえず本日予定してございました項目については以上ですが、事項書の4番のその他の項目で、皆様から何かございますでしょうか。

よろしいですかね。

特段なければ、本日はこれで、ちょっと早いですが、会議を終了させていただきます。

次回については、来年の1月ぐらいに予定させていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

本日はどうもありがとうございました。